

「おかげ様」の向こう側に

山内 千晶

(やまうち ちあき)

久しぶりに会った親類や友人に「お元気ですか。」「お変わりありませんか。」と尋ねると、「おかげ様で。」という言葉が返ってくる。今の若い人からは、あまり聞かない言葉だが、私はこの言葉を聞くと、いつも心の中で「くすつ。」と笑ってしまう。それは私が、まだ幼稚園に入学するずいぶん前のこと。当時、仕事で忙しかった母に代わって、私の世話をしてくれた母方の祖母との懐かしいエピソードがあるからだ。

祖母はたいへん信心深い人で、ときどき檀家だったお寺の集まりに私を連れて行った。来ているのは、祖母と同じお年寄りばかりで小さな私は、いつも皆さんからお菓子や、時にはお手玉、折り紙などの遊びを教えてもらい、とても可愛がっていた。そんな集まりの時に、祖母たちの交わす挨拶や会話の中で、たびたび出てくる不思議な言葉。

それが「おかげ様」だった。

祖母たちは、互いに相手の体調や生活のことを気遣い、気遣われた方は「おかげ様で。」と答える。自分の靴紐も満足に結べないくらい幼かった私は、会話に出てくるこの「おかげ様」は人であり、「きつともものすごく偉い人なのだろう。」と思っていた。なぜなら絵本に出てくるお姫様や王様には必ず「様」が付いているし、神様や仏様にも「様」が付いている。だから「きつと立派な人なのだろう。」と勘違いをしていた。しかし一向にその「おかげ様」とやりに会うことも、どんな人なのかも、どこに住んでいるかもわからない。

ある時、お寺に出かける道すがら、祖母に思い切って尋ねてみた。

「おばあちゃん、おかげ様ってどこに住んでいるの。どんな人なの。」

その時の祖母がどんな顔をしていたのか、どういふ会話をしたのか、今はもう忘れてしまったが、「おかげ様」のことを、

「そりゃ人じゃなくなってるね、そういう言葉なんだよ。」と教えてくれた。

けれども、その会話の最後に一言「ひよつとしたら、神様とか仏様なのかもしれないね。」と話してくれたのを今でもよく覚えている。

時が経ち、私は幼い娘二人の靴紐を結んであげる立場になった。「おかげ様」の勘違いエピソードを覚えてはいたが、自分自身ではあまり会話の中に「おかげ様で。」という言葉を使う機会はなかった。

しかし、それからほどなくして忘れかけていた「おかげ様」の意味を、身を持って体験する出来事が起きたのである。

三十を過ぎた時、突然、私は白血病という血液の病気に襲われた。今の医学では不治の病ではなくなったが、生死に係わる難しい病気である。約一年に亘る壮絶な治療の末、何とか一度は生還できたものの、一年半後に再発。さすがに死を覚悟して、残された人生の過ごし方を考えた。その時、医師から「骨髄移植」を受けてみませんか、と言われた。ただし骨髄移植には、健康な人の骨

髄液が必要で、それは誰の骨髄液でもいい、というわけではなく、骨髄の型が合った人でなければならず、確率は兄弟でも四分の一、他人だと数百から数万分の一だという。私には姉がいるが、姉とは一致しなかった。その場合、骨髄バンクに登録して、見ず知らずの方から、善意の骨髄液を提供してもらうしかなかった。幸い、登録して一年ほどで「ドナー」と呼ばれる骨髄液提供者が見つかり、骨髄移植を受けることができた。それから半年後に退院、無事に病気を克服することができ、今に至っている。

顔も名前も、住んでいる場所も、どんな人なのかもわからないドナーさん。この方の尊い志がなければ、私が生還することはできなかった。

この時、私の頭に浮かんだのは、忘れかけていた、あの「おかげ様」という言葉だったのである。私にとっての「おかげ様」は、骨髄液をくださったドナーさんであり、治療してくれた医療スタッフの方々であり、支えてくれた家族であり、友人であり……。それはすべて「人」であった。ただの言葉ではなく、紛れもなくそこに存在する、実像を伴った言葉なのだ。

あの時、祖母は「人じゃなくて言葉だよ。」と教えてくれた。けれども、その後につぶやいた「でも神様とか仏様なのかもしれないね。」と言うのは本当なのかもしれない。私の命を助けてくれたのは、ひよっとしたら神仏のご加護もあったかもしれない。その神様や仏様は「人」という実在の中に存在しているのだから。

今、私は同じような血液の病気の患者さんやご家族のためのボランティアをしている。お世話になった骨髄バンクのお手伝いもしている。それは私もいつか誰かの「おかげ様」になれるかもしれない、という思いがあるからだ。特別、誰かがお礼を言ってくれるわけではない。対価を得られるわけでもない。私は恩返しのもりで、いつか誰かの「おかげ様」になりたいと思っているのだ。

「おかげ様」は表に立つものではない。「陰」なのである。もう一つ「おかげ様」の後に続く言葉は、概ねプラスの状態が多いように思う。今風の使い方には、全く逆の意味で使われる言葉もあるが、本来の使い方では「おかげ様」の後に続くのは、明るく前向きな言葉である。

「おかげ様で元氣になりました。」「おかげ様で楽しかったです。」「これらの言葉をつなげているのが、「おかげ様」なのである。

そう考えると、世の中に「おかげ様」という言葉が増えれば、その後にくプラスの状態、上向きな状態も増えている、と考えることはできないだろうか。「おかげ様」の続きにあるのは、人々の「幸せ」や「喜び」のような気がする。「おかげ様」に似合うのは幼い私がみた、あの時の祖母たちのお互いを気遣う、温かい笑顔なのだ。

今年、日本は未曾有の災害に見舞われた。その後も自然災害と人災の脅威に、多くの人々が打ちのめされている。全国各地、いや世界各国で様々な支援活動が行われているが、それはきっと誰かが誰かの「おかげ様」になっている、ということだと思う。

「おかげ様」の姿は見えない。でも確実に存在しているのである。その姿は

さまざまであろう。一人ひとりが、誰かの「おかげ様」で生きている。そして誰かの「おかげ様」になっているのだ、と私は強く思う。

これまであまり使わなかったこの言葉。私は心をこめて、相手の気持ちに感謝して、明るい笑顔で「おかげ様で。」と言おう。そして今、苦難の中にいる人たちに、一日も早く「おかげ様で……。」と心から笑って答えてもらえる日が来るように、「二人じゃないよ。」という想いをこめて、その先にある明るい未来を信じて、これからも歩き続けていきたい。